

# 知的障害児の日常生活の指導における学習環境の改善に関する考察

澤田 佳苗

## I 問題

文部省により策定された盲学校、聾学校及び養護学校施設整備指針(1999)では、(1) 障害の特性等に配慮した施設づくりの推進、(2) 弾力的対応のできる学習環境の整備、(3) 快適、健康、安全な学習・生活環境の整備、(4) 地域の生涯学習やまちづくりの核としての施設・環境の整備が示されている。ここでは、具体的な学習環境の定義や整備については触れられていないが、施設・設備や環境への適応を図ることが大切であることがわかる。しかし、特別支援学校の学校建築計画は、障害児の実態を把握し行われていたのではなく、過去の事例・慣例、政府刊行の指針、書類などを頼りに計画を立てていたように思われる。

また、文部省(2000)の盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説によると、知的障害児を教育する養護学校には、自他の意思の交換及び環境への適応が著しく困難であって、日常生活において、常時多くの援助を必要とする程度のもの、環境の変化に適応することが困難で、他人の助けにより、ようやく身の事柄を処理することができる程度のもの、日常生活に差し支えない程度に身の事柄を処理することができるが、抽象的な思考は困難である程度のもののうち、特に社会的適応が困難なものが在学しているとしている。ここでは、日常生活において環境的適応や社会的適応の困難者が在学していることが示されている。つまり、知的障害児の指導では、「日常生活の指導」が大切であることがわかる。

しかし、現在、知的障害児の教育を行うにふさわしい学習環境整備を整えるための研究や資料は少ない。

## II 目的

本研究では、知的障害児の「日常生活の指導」に取り組んでいる特別支援学校の教師を対象とし、以下の点を明らかにして、学習環境の改善について考察する。

- 1 知的障害児が日常生活の指導場面で示す学習のつまづきなどの困難にはどのようなものがあるか(ここでいう困難とは、教師が期待しない行動とする)
- 2 1に対して、教師はどのような手だてで、どのような実践を行っているか
- 3 知的障害児の学習環境改善に関する教師の意識について

## III 手続き

研究1では、予備調査を経て以下のような調査を行った。

知的障害児が日常生活場面で示す困難を明らかにするとともに、困難に対して、学習環境を改善するために教師はどのような手だてや実践を行っているかを明らかにすることを目的に行った。独立行政法人国立特別教育総合研究所の特別支援教育実践研究課題のデータベースから、「知的障害」、「日常生活の指導」、「学習」のキーワードで検索し、ヒットした88件の中から小学部について述べられている49校の小学部主事に依頼し、低学年、中学年、高学年の教員を対象に調査を行った。調査方法は郵送による質問紙調査であり、期間は9月中旬から10月上旬の間で行った。

次に、研究2として、知的障害児の学習環境改善に関する教師の意識や具体的改善点を明らかにすることを目的として調査を行った。対象は、研究1の結果により選定したA校とB校とし、

実地調査を行い、情報の補完は担当者へのインタビューにより行った。

## IV 結果及び考察

### 研究1

49校に調査用紙を送付し、38校から回答があった（回収率77.6%）。

学習環境上の困難については、全体的に児童が集中できず注意がそれ、学習の妨げになるような要因が多くあった。

このような状況を改善するためには、収納方法を改善することや刺激が直接児童の視界に入らないようにすることが行われていた。また、苦手な音や雑音など「音の環境」については、「雑音を減らす」や「離れる」などの改善しかとられておらず、直接的な改善には至っていないことがわかった。

全体的に視覚的な手法による学習環境の改善が目立った。子どもにとって見えやすい、子どもの目線にあることが大切だということである。また、場所の構造化を図るといった改善が多かった。つまり、子どもたちの実態に応じた活動空間を用意することが大切であるといえる。

工夫・改善は、学習環境そのもの（施設・設備）の改善より、教材・教具の工夫をしていることが多いといえる。

改善の成果を求めた結果、学習環境を整備することにより、子どもにとって困難が「おおいに改善された」という結果が得られた。

また、知的障害児の学習環境の改善に対してどのような努力が必要か回答を求めたところ、児童生徒の実態を知り、環境を見直すなどの回答が多かった。それは、「子どもたちのつまずきとその理由を知る努力」「実態を見直し、子ども自身が自分で取り組むことができる環境を常に考え支援し続けること」「実態把握を正しく行い、本人

に合った環境を整える」など、子どもの実態把握が大切であるということである。しかし、学習環境の改善についてどこからアイデアを得たか回答を求めたところ、一番多い回答は、「先生方からの助言（先輩・同僚など）」の回答であった。この結果から、教師は児童の実態が大事であるとしてもいながらも、実際には児童の実態そのものからの改善のアプローチではなく、経験のある教師の助言が一番大切であったことがうかがえる。

いろいろな学習環境の場面ごとに調査をしたが、どの場面においても、児童がわかるように物の設定が行われることが大切であるとの結果が得られた。また、学習環境の改善がしやすいものや改善がしにくいものがあることも結果から示された。

村中（2007）は、児童にとって分かる、理解する手だてが必要であり、児童が分かるために“いつ、どこで、誰と、何を、どのような手順で、どうなったら終わり”であるか、その手がかりが大切であると述べている。このことから、学習環境の改善には、日常生活に参加を促す（高める）ための手がかりをポイントとして考えることが重要であるといえる。

アンケートは、低学年・中学年・高学年に分けて回答を得た。環境設定の違いはおおむね低学年ほど物理的構造化の密度が濃くなっていることがわかった。個々の児童の特性に応じた環境や設定に重視しているため、中学年や高学年においては部分的に個別化された物理的環境の構造化がみられた。

### 研究2

1 知的障害児の障害特性をどう捉えているかに対しては、個の特性に応じた指導が必要な児童であるということだった。新しい環境や変化に対して、対応が難しいことや未経験であったり、未学

習であったり、やったことのない活動に関して抵抗があるなどが挙げられた。また、なかなか外から見ただけではその障害がわからない子どもであるとのことであった。

2 知的障害児は日常生活場面で一般的にどのような困難があるかに対しては、物にこだわる、順序をきちんと守るなどの技能面の困難や、意欲面、感覚面で困難があるとのことであった。また、コミュニケーションが取れない、相手の気持ちがわからないなどの困難があるということだった。

3 学習する上で、知的障害児が適応しやすいようにどのような配慮をしていますかに対しては、学習空間を作っておくことや学習のルールを決めること、授業の中で、空間的な構造化をすることや、ユニバーサルデザインの授業作りをすることなどが挙げられた。

4 先生方はより適応しやすい学習環境をつくるためにどこから情報を得ていますかに対しては、校内研修や研究会で情報を得ることや実践事例をもっている校内の同僚に質問する、専門雑誌、専門的な書籍などを読むことであった。

5 より適応しやすい学習環境をつくっていく上で一番大切なことはなんだと思いますかに対しては、物理的環境では、活動に応じた教室や場所の設定と、物や道具の配置が大切になってくるということであった。また、子どもの実態に合ったような環境を物理的に作っていくことが重要であるとのことだった。

心理的な要因では、信頼関係をつくることであり、適切な課題設定が大事であるとのことだった。そして、その子どもにあった課題でないといけなということであった。

6 一つの学習環境整備がうまくいかなかった時、どのように改善に取り組みましたかに対しては、ただ単にアイデアや思い付きではなくて、子

もの課題を捉えながら、その課題が学習の系統性にきちんとのっっているのかを検討することが重要であるということであった。

以上のことから、知的障害児の障害特性は、幅広く生活全般に及ぶため、日常生活を送るにはいろいろな角度から子どもの実態を見る必要があるといえる。そのため教師は、子ども一人ひとりの特性を把握するため、生活から介入し、学習環境を整えていかなければならないということである。また、知的障害児の学習環境の改善は、具体的な手だて、支援の工夫により、行わなければならない。しかし、特定の子どものみで行う方法が他の子どもにとっては、逆効果になってしまうことも考慮して学習環境を考えなければならないということである。

## V 今後の課題

児童にとって、苦手な音や雑音など「音の環境」については、直接的な改善には至っていないという結果が出たことをふまえ、「音の環境」の改善についてはさらに検討する必要があると考える。

また、回答全体に見られたのだが、学習環境の改善方法、指導のやり方や方法面などの回答が多かった。

さらに、教師も物理的環境の一つであるということである。このことから、児童への言葉かけや関わりのタイミングなどが、どのように影響を与えるかについて検討していく必要がある。

今後は、特別支援学校に移行し、障害種にとらわれない個々の実態に応じた物理的な学習環境計画や整備が一層必要になるので、他の障害にも合わせた学習環境の改善について検討していく必要がある。

文献

村中智彦(2007)行動問題を起こさずみんなで分かって動ける授業づくり。発表会資料.カウンセリング研修会。